馬がいて、人がいて、
そしてまた馬がいる
みやざき
ていい
の.まど
プロジェクト
世界が少し
広くなる。
宮崎県立芸術劇場
公財法 一般社団
宮崎県立芸術劇場
MIYAZAKI PREFECTURAL ARTS CENTER

八月は軒先に蟹が横切ったのだが、十月の泊まりではついぞ見かけなかった。歯ブラシや寝間着を宿に置いて目的地へ向かう。もう幾度目だろう。初夏から祭りの準備を覗き、史跡を訪ね、馬を追う人々に交じってきたが、そんな日々も終わりを迎える。最後の日の玄関を開け、蟹のいないゲストハウスから対岸を眺めた。朝靄の先、小高い山をひとつ挟んで、これから向かう岬が見える。

宮崎県の最南端に位置する、都井岬。岬馬とその繁殖地として国の天然記念物に指定され、火まつりなどの地元行事も例年おこなわれる人気の観光スポットだ。私も十代の頃に一度訪れたことがあったが、その時は灯台に登ったり、景勝地を背景にピースサインしていただけで、土地の歴史や生態について深く考えることはなかった。今回、アートプロジェクトの開催を機に再訪しなければ、その時の印象を持ちつづけたままだっただろう。

雨の降りしきる十月八日が、すべての行程の締めくくりだった。悪天候による変更は多少あったものの、正午過ぎから予定通り行われると報されていたプログラムの記録へ急いだ。拠点であるビジターセンターに到着し、岬に惹きつけられた人々の知りたい、解りたいという真摯な足取りに、ひたすらついていく。記録係と言いながらほとんど当事者として参加していた。循環する生命の物語。言葉のない対話の模索。切実な文化の継承。アーティストたちの起こした表現を目の当たりにすることで、都井へ通うたび頭をよぎってきた数多の言葉や、霞のような予感が、ひとつひとつ輪郭を帯びていく。そこで思い起こされたのは、初めてフィールドワークに訪れた時に見た、幻のような光景のことだった。

六月の朝。映像作家の伊達忍氏が日の出を撮影するというので、寝起きの身体に鞭打ちながら同行した。早朝の山中は深閑としていて、まるで私のイメージしていた都井岬ではなかった。馬が草を食む音が、ぼりり、ぼりりと、濃い霧の向こうから聴こえてきたりする。舗装された道はやがて途切れ、道標のない山肌のうねりを登っていくことになり、もう観光地にいるような気分はすっかり無くなっていた。

頂上には三頭の馬がいた。その姿を見つけた瞬間、なぜだか思わず身を伏せてしまった。自然の循環の中にいる彼らと、人間社会に守られた私。同じ大地を踏みしめながらも、そこには不可視の境界が引かれているように感じた。一頭の馬が悠然とした足取りで進み、石造りの台に乗り上げる。蹄が置かれた先は、戦時中に用いられた電波塔の台座だった。今まさにここに生きるものたちの足元に、打ち捨てられた遺構が埋もれていく。それはまるで、文明の終わりを啓示されたかのような、幻影的な光景であった。

今回、奇しくもすべてのプログラムにおいて「この場所で生きるとはどういうことか」というまなざしが投げ掛けられていた。答えや結論を要する問いではない。私たちにその気持ちが、わずかでも湧き上がれば良いのだ。観光客として訪れた頃には想像することもなかった、繰り返される岬のひととせ。春駒の柔らかな毛並み。祭りの練習をする地元の子どもら。すべての花が枯れ、この秋が過ぎ去ったら、人も馬も冬支度するのだろうか。

雨のまま最終日が終わる。高揚した表情の参加者たちと共にビジターセンターを出ながら、私はこれからまた何度もこの場所に訪れるだろうと思った。丘の上から都井の渚を眺望したり、麓の海岸沿いから岬を遠く見上げたりして、ここに生きるものたちに思いを馳せたい。

またいつかのその日、玄関を開けたら、足元を蟹が横切ったりするのだ。

グンジキナミ

1990年宮崎県えびの市生まれ。写真家として活動する傍ら、映像・デザイン・執筆なども手がける。文芸誌「文学と汗」編集長。音楽グループ「nuun」所属。MRTラジオ「GO！GO！ワイド」内で本を紹介中。

ふりかえり

風と嵐の記憶

十月六日（金）晴れ　［会場設営・リハーサル］

丘のあちらこちらに佇む御崎馬たちを横目に、人間たちは朝から岬内をあっちに行ったりこっちに来たり。どうも明日からの天気の雲行きがあやしい。雨天でも開催できるように、屋外と室内の両方で準備する。

会場のひとつになっている旧「都井岬ビジターセンターうまの館」は三年前に閉館していて、今は電気も水道もガスも通っていない。今回はそれを逆手にとり、照明や音響も必要最小限にとどめることにした。小松ヶ丘の広場では、五十嵐さんと一緒にワークショップのテント位置を決めて準備完了だ。

日が暮れるころ、ビジターセンターの外壁を使って、川村亘平斎さんの影絵パフォーマンスのリハーサルが始まった。ふと背後に気配を感じて振り向くと、一頭の御崎馬が、黙々と草を食べながら、時折じっと影絵を見つめていた。影絵は壁だけでなく、芝生や森の木立にも投影されていく。リハーサルが終わるころ、御崎馬もどこかへと姿を消していった。

実は川村さんのパフォーマンスは、屋外で上演できたのはこの日だけだった。幻のステージを観ることができたのは、スタッフと一頭の御崎馬だけ、だったのである。

十月七日（土）曇りのち雨、時々晴れ間　［一日目］

劇場スタッフや串間市役所の方々、大学生スタッフなどが朝早くから岬に集合して、準備を始めている。朝からとても風が強く、時折小雨がぱらついているが、なんとか曇りといったところだ。

午前十時三十分、最初のプログラムである秋田優さんの「都井岬ガイド」が始まった。約二十名でぞろぞろと小松ヶ丘に登っていく。

岬には至る所に馬糞が落ちている（歩くときは要注意だ）。そのうちのひとつを崩すと、中からコガネムシが出てきた。御崎馬が草を食べて排出した馬糞は、虫たちに分解されて土に還る。そこにまた草が育ち、それを馬が食べる。その繰り返しなのだと秋田さんは説明する。

都井岬に生きるのは御崎馬だけではない。イノシシやアナグマなどの動物もいるし、植物の多様さも岬ならでは。例えばオキナグサは、毒があるから馬が食べずに生き残るのだそうだ。約一時間のガイドでは、岬のエキスパートである秋田さんならではの視点で、岬の生態系が紐解かれていった。

続いてビジターセンターで、これも秋田さんの案内による「くらやみ展示室ツアー」。今では誰も見ることができない貴重な展示室を、くらやみのなか懐中電灯を頼りに見て回る。御崎馬のはく製がお出迎えし、馬の生態や、岬の歴史や自然を解説する展示などが続く。小さいながらも充実した展示資料に、大人も子どもも興味しんしんだ。

それから、二階の360°シアターでは映像作品「界」の上映が行われた。都井岬で毎年行われる「都井岬火まつり」を中心に、地域の方々や、伝統芸能の臼太鼓踊りを継承する子どもたちの練習風景を追ったドキュメンタリー作品だ。

伊達忍さんは、川村さんや五十嵐さんのフィールドワークに同行したり、祭りの準備や踊りの練習に参加しながら、人々の話を聴き、岬の季節や一日の移ろいをカメラに収めてきた。そうしてその日上映された映像には、たくさんの〝声〟が詰まっていた。登場するのは、子どもから大人まで、世代も違えば仕事や立場もそれぞれだ。語る人の数だけ違う景色が見えてくる。伊達さんは、岬がそこに在り、今ここに生きている人々がいる、ということを〝ただ映していた〟のだった。

一方その頃、小松ヶ丘の広場では、五十嵐靖晃さんが机に小松ヶ丘の地図を描いていた。五十嵐さんのワークショップ「風と馬」は、「馬になって風を探す」というもの。参加者はグループ＝群れ（ハーレム）にわかれ、自分が御崎馬になった気持ちで小松ヶ丘にのぼり、風を探す。

このグループを導く〈ハーレムリーダー〉を、四人の「御崎馬の専門家」にお願いしていた。宮崎大学農学部附属住吉フィールド施設長の小林郁雄さん、串間市エコツーリズム認定ガイドの世良田明呼さん、野生馬監視員の渡邉木直さん、そして秋田さんだ。四人とも「avec Toi」全体にとっても欠かせない存在である。

ワークショップは、特製の「御崎馬カード」を使った解説から始まる。これは小松ヶ丘に主に生息する四十四頭の馬たちの、顔と番号、性別、年齢がわかるという優れもの。彼らの特徴を表した、世良田さんの「一言」もついていて、このカードを群れごとに並べて解説を聞いていると、人間関係ならぬ〝馬関係〟がよくわかる。

その後、五十嵐さんから〈かぜよみ〉の説明があり、広場に並べられた〈かぜよみ〉をひとり一本手に取ると、一グループ六〜七人ほどの群れにわかれて丘に登っていった。

かぜよみ：風を感じ、気配を感じ、流れを予測することで、馬どうしのコミュニケーション（感じ方）を想像する道具。

丘にいる間は、できるだけ言葉を使わない約束だ。カメラとスマートフォンも置いていく。普段よりも五感を意識し、馬のコミュニケーションのしかたにならってみる。時折足を止めて、〈かぜよみ〉をたよりにじっと風を感じてみると、同じ丘でも、場所によって風の吹き方が全然違うことがわかる。

一時間ほど丘で過ごし、広場に戻ってそれぞれの群れが通ったルートを地図に書き込んでみた。それから丘の上で感じたことをシェアして、終了だ。参加者アンケートには、こんな声があった。「よく知ったつもりの場所でも新しい発見、心地よさがありました。風は目には見えない、ということにはっとしたり、時間の感覚が消えたり、感じることを研ぎ澄ましたワークショップでした」。

そのままビジターセンターに移動し、五十嵐さん、世良田さんと約三十分のアーティスト・トーク。机に描いた小松ヶ丘の地図を見ながら、終えたばかりのワークショップを振り返っていく。なんだかまだ、ちょっと心ここにあらずの感じである。

さっきから降り出していた雨が、二回目の「界」の上映が終わる頃には、いよいよ強くなっていた。影絵パフォーマンス「御崎馬の夢」は、ビジターセンター二階のシアターで上演することになった。

川村さんが鈴を小さく鳴らしながら登場し、やがてシアターの円形の壁に影が立ち現れる。

物語はこんなところから始まる。昔々、竜宮城でソテツの女神の実を食べたカラスが追放され、海を渡り都井岬で力尽きる。カラスの亡骸から大きなソテツが育ち、その子孫たちが今も岬を守っている……。都井岬はソテツの自生地の北限とされている。ソテツは一年で一〜四cmほどしか成長しないそうだが、岬のソテツはどれも一mは優に超えている。

物語では、一頭の母馬が、動物たちの集まる水辺で水を飲み、森のなかへと入っていく。そして静かに身を横たえると、今までに産み落とした子馬たちの夢を見る。やがて母馬がその命を終えると、知らせを聞いた動物たちがその死を弔い、その肉を食べる。その亡骸から、小さなソテツが芽を出す……。

御崎馬は死んだあと、ほとんどの場合は自然のままにされる。はじめは他の動物や鳥が、最後は虫などの小さな生物が、馬の体を食べて土に還すのだ。森に入ると、馬の骨に出会うこともある。これは岬で繰り返される、命の循環の物語だ。

上演の途中、川村さんが子馬の影絵人形を客席で観ている人に渡していくと、たくさんの子馬たちがシアターのなかを駆け巡った。終演後の会場は興奮冷めやらぬ様子で、子どもも大人もたくさんの人が、川村さんと影絵人形のまわりに集まっている。

外では雨風がどんどん強さを増していた。明日の最初のプログラム「都井岬ガイド」は安全のため中止を決定。他はとにかく朝まで様子を見ることにする。

十月八日（日）嵐　［二日目］

朝になっても雨風は強い。夕方には暴風の予報も出たため、やむなく全体の終了を早めることを決定する。

二日目のスケジュール

12:30〜13:00　「くらやみ展示室ツアー」
13:00〜13:30　映像作品「界」上映
14:00〜15:00　ワークショップ「風と馬」
15:00〜15:30　アーティスト・トーク
15:45〜16:30　影絵パフォーマンス「御崎馬の夢」

この日、「界」上映の客席には地元の都井地区柱松保存会の方の顔もあった。県外や串間市外からの来場者も多く、アンケートでは「知らない土地のことなのに、不思議と自分の土地に充てて考えてしまい、涙腺が緩くなってしまいました。時間をかけて作られた作品だということがよく分かりました」という声も寄せられた。

ワークショップ「風と馬」も急遽、室内に内容を変更。シアターの中央に一本の糸を張り、参加者と一緒に〈かぜよみ〉の吹き流しを掛けて空間をつくったら、まずは一人ずつ好きな「御崎馬カード」を選んで、カードの馬になりきって自己紹介する。見知らぬ人同士で兄弟や恋敵になったりして、みんなが個性を持った一頭の御崎馬になってその場に立っていると、昨日とはなんだかまた印象が違って面白い。

それから、シアターの空間に広がって立つ。五十嵐さんが〈かぜよみ〉を手に持って、参加者たちの間を鈴の音を鳴らしながら歩く。人が歩くと小さく風が起こる。参加者は、風を感じたら、そっちのほうに体の向きを変えてみる。すると、シアターのなかを風が渡っていくのが見える……。かぜよみを持つ人を交代しながら、しばらくの間、静かに感覚を澄ませて風を感じた。

その後は五十嵐・川村・伊達各氏によるアーティスト・トーク。今回のプロジェクトが初対面にも関わらず、初めからすっかり意気投合している五十嵐さんと川村さん。この日も話し始めたら止まらない。横で黙って頷き続ける伊達さんは、話が振られると「僕も（心の中で）そう思ってました！」。終始笑いの絶えない和やかなトークとなった。

最後を締めくくる「御崎馬の夢」は、悪天候にも関わらず満席に。アンケートでは「野生馬の住む世界に惹き込まれました。屋外の影絵は残念ながら観ることはできませんでしたが、屋内の影絵もまた素敵でした」などの感想が寄せられていた。この日も終演後はたくさんの人が、川村さんに話しかけたり、影絵の装置をのぞき込んだりして、終演後の余韻を楽しんでいた。

Avec Toi

に寄せて

青い風の岬

宮崎県最南端に野生馬の生きる岬がある。そこは、自然と馬と人が永い時をかけて絶妙なバランスで織り成した〝どこにもない場所〟であった。岬の三方を囲む碧い海、馬が生きて（食べて）つくった蒼い丘、その先に広がる青い空。そこで私は風の流れに出会うことになる。

はじめて丘に立ったとき、目の前に馬がいて、その先に水平線があって、その下にトンビが飛んでいた。どこか立ったまま夢を見ているような不思議な浮遊感があった。そこで野生馬は、草を食んだり、寝たり、繁殖したり、といった生きることに直結したこと以外に〝風をさがしている〟ということを知った。彼らは風に立って、後ろ足のかかとを片方だけ上げて、3本足で立ったまま気持ち良さそうに眠るのだ。観察を続けると、やがて風や気配や兆しといった自己や他者とのあいだにある〝流れ〟を読むことが馬のコミュニケーションにとって重要なのではないかと考えるようになった。

ワークショップ「風と馬」は、スマホと言葉を置いて、〈かぜよみ〉（風や気配や兆しを感じる馬のコミュニケーションを想像するための吹き流しのついた杖）を手に、はじめて出会った人たちでハーレムをつくり、丘を巡る1時間。目には見えないものに意識を働かせることで、最初ぎこちなかったハーレムが徐々に〝群れ〟として形を成していった。強い風に寒がる子どもがいれば、大人が数人寄り添い自然と壁をつくることもあった。

野生馬と同じように〝流れ〟を感じて移動する4つのハーレムが二松の下の広場で偶然遭遇した時、不思議な光景が広がった。互いのハーレムを意識しながらも、適度な距離を保ち、それぞれがどこかに向かっていく。それはまるで風のようでもあり、馬のようでもあり、言うなれば大きな〝流れ〟となっていた。

ワークショップを終え、一時間ぶりに人間の声を聞く。いかがでしたか？問いかけに対しても、しばらくみんなぼんやりしている。まだだいぶ馬のままだったのだ（笑）。

こうして、風を探し、気配を感じ、兆しに意識を働かせることで、普段使い慣れた人間の感覚から離れ、この世界と出会いなおしたのだった。馬が感じている世界を旅した、あの開かれた感覚は、まだぼんやり残っている。

ワークショップ
「風と馬」

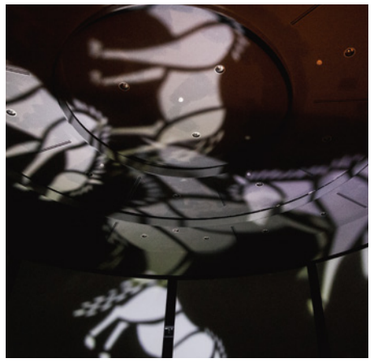
五十嵐靖晃

人々との協働を通じて、その土地の暮らしと自然とを接続させ、景色をつくり変えるような表現活動を各地で展開。アートとは自然と人間の関わりの術であり、この時代、多様な人々をつなげるものとしてあると考える。代表的なプロジェクトは、樟の杜を舞台に千年続くことを目指す《くすかき》（太宰府天満宮／2010〜）、漁網を空に向かって編み上げ風景をつかまえる《そらあみ》（瀬戸内国際芸術祭2013／16／19）など。

Avec Toi

に寄せて

ただ　そこに
生きている　ということ。



バリ島の影絵芝居は、人間と自然〜動物や植物、ひいては死者や精霊〜を繋ぐツールである。バリ島における影の営みを観察していると、影絵師は、人間の為だけに上演していないことに気付く。影絵が上演される「場」にいる全てが観客なのである。

それは、かつて日本でも盛んに行われていた祭りと芸能のあり方によく似ている。自然から恵みをいただき、その感謝と畏怖の念を込めて祭りと芸能を行い、自然に還していく。人間と自然は、一つの大きな循環の中で、共に生きている。影絵を始めとする原始の芸術は、その循環系を顕（あらわ）にする。

本番2日間は天候に恵まれず、ビジターセンター内での上演になったが、本番前夜は当初の予定通り外の芝生でリハーサルを行った。リハーサルを終えると、スタッフの方が「馬が一頭、草を喰みながら、ずっと影絵を見ていた」と嬉しそうに教えてくれた。

僕が影絵芝居を上演するのは、このためである。

人間と自然が、一つの「場」に集うこと。

ただ そこに お互いがいる ということ。

現代に生きる僕たちは、細かい差異に苛立ち、批判を繰り返し、ますますお互いを認め合えずにいる。共に生きるのに必要なのは、ありのままの存在を、お互いに認め合うことだ。

ただ そこに 生きている ということ。

それは、あの夜、影絵を観にきた馬が、そっと僕に教えてくれたこと。

影絵パフォーマンス
「御崎馬の夢」

川村亘平斎

1980年、東京生まれ。インドネシア・バリ島の伝統影絵【ワヤン・クリット】を現代的な文脈で捉え直し、新たな芸能のカタチを模索し続ける影絵師。世界各国で影絵と音楽のパフォーマンスを発表。日本各地でフィールドワークやワークショップを行い、土地の記憶を手がかりに影絵作品製作。その他、切り絵や映像制作、映画・CM等への楽曲提供など幅広く活動している。ガムランを使った音楽ユニット【滞空時間】主宰。

avec Toi

に寄せて

撮って、録って、執って。

映像作品「界」
伊達 忍

1996年宮崎県生まれ。自主制作映画、宮崎県内アーティストのMV、企業PR映像などを制作。映像制作会社勤務を経て現在は映像制作チーム「jumpcut」にてオリジナル作品を多数発表。【WORKS】ベランバレードMV「メモリーズ」、The Bimboes「black bard」、アーツカウンシルみやざき「石川浩司 宮崎を叩く」都農町移住定住促進サイト 百年の誠実都農町HP動画制作、環ROY参加型パフォーマンス『Fine Game』／環ROYソロ・パフォーマンス宣伝広告動画制作など。

怒涛の〝都井岬〟を終えて二週間後、僕は県南で映画のロケハンをしていた。立ち寄った公園に、そこそこでかい球体型のオブジェが鎮座していたが、それはタイムカプセルだった。〝子供達の夢と希望を詰め込んで〟いるらしい。夢と希望を詰め込んだ子供たちは今どこで何をしているのだろうか。

avec Toiの初打ち合わせは22年の12月。その頃僕は数年勤めた会社を辞めたばかりだった。それまで〝アートプロジェクト〟や〝フィールドワーク〟という言葉に馴染みがなく、ちゃんと理解していたかは今でも分からないけど、嘘のない作品にしようとは決めていた。

「火まつり」を中心に撮影は進んでいき、臼太鼓踊りの練習風景を撮影していくうちに気がつけば夏が来ていた。現地の方達は僕の想像を遥かに超えて、リアルな声と嘘のない表情（僕にはそう見えた）を出してくれた。

うまくいく。と思った。

上映の前日。僕は海洋荘にこもってまだ編集をしていた。露木さんが優しいせいだ。担当の露木さんは僕に優しい。作品について話をすると露木さんはいつも、「伊達さんのやりたいように、やっちゃってください。」と言ってくれる。こんな人はなかなかいない。そんな露木さんの優しさも相まって、「界」はなんとか完成した。

当日、観てくれた人たち、これから観るかもしれない人たちにこの映像はどう作用するのだろう。

いつか、何かの拍子に誰かがこの映像の事を思い出す、かもしれない。

それは正しいタイムカプセルをつくれたということになるのだろうか。しめしめ。

また会えるその日まで、ビシバシ腕を磨いて、僕の好きなように、好きなものを、やっちゃおうと思う。

avec Toi

に寄せて

馬と人に紡がれた縁を想う

「都井岬ガイド」
「くらやみ展示室ツアー」
秋田 優

昭和53年（午年）生まれ。栃木県那須塩原市出身。都井岬の野生馬に憧れて宮崎県串間市へ移住。宮崎大学大学院農学研究科卒。都井岬ビジターセンター解説員を経て、串間市文化財専門員として平成20年串間市役所へ入庁。令和4年から現職。（御崎馬に魅せられたウマ年男！都井岬に泊り込みで御崎馬に密着、馬糞からハガキも作る馬マニア。）

四半世紀近く、都井岬の馬たちと共に生きてまいりました。私は理科系の人間で、身の回りの交友関係も含め、馬に対しては理科学からの目線がほとんどであったと思います。そうした中で開催されたavec Toiは、今までの人生では出会えなかった「アート」という目線で、とても貴重な体験をさせて頂きました。

都井岬の馬たちは「野生馬」と呼ばれますが、元々は江戸期に武士の馬を育てた牧場が由来であり、ここで馬を育むという里人の生活文化と共に残された環境です。決して馬だけが単独で生きたのではなく、そこには馬と共に生きる「人」が不可欠だったのです。しかし長年、都井岬に通ってみて改めて思うことは、この雄大な風景ばかりを目にしていると、あたかも自然にこの環境が元々あったかのごとく、ここに生きる多くの「人」の顔は、ほとんど見えてこないという現状でした。この場所で馬と生きる人々の顔にスポットを当てたい。その生活文化に焦点を当てたい。理科学とは違った切口で、新しい都井岬に出逢いたい。avec Toiは、そうした私の想いをアウトプットしてくれるものでした。

思い起こせばavec Toiは、もう20年も昔、都井岬での出会いからご縁が紡がれて実現したものでした。とても感慨深く、私のこれまでの人生も、続けてきてよかった！と思えるものに意義付けられました。馬と人が紡いだ多くのご縁、出会いに多謝！

イラストレーション

スズキトモミチ

今回「avec Toi」のキービジュアル制作にあたって何度も都井岬に足を運び、日の出前から日没後まで様々な時間帯に小松が丘の頂から御崎馬を観察しました。

刻々と変化する空と海と大地の色彩に息を呑み驚嘆する人間をよそにひたすら草をはみ続ける馬を見ながら、彼らはこの土地で一生を過ごす間にどれだけ多くの色彩の中で過ごすのだろうか、という思いが生まれました。

この思いから着想を得て、都井岬の持つ色彩の多様性に焦点を当て、今回のアートプロジェクトを通して〈アーティストがこの土地から感受し創造するものが新たな色彩を生み出し、悠久の風景と混じり合って都井岬の新しい色彩＝魅力となっていくこと〉をイメージしました。「avec Toi」を経てまたひとつ加わった新しい色を探しながら、改めて小松が丘を登ってみようと思います。

イラストレーター。1976年東京生まれ。20代の頃チベットを旅行中に、言葉の通じない現地の人たちと手帳に書いた絵を通じて意思疎通を図った経験から、コミュニケーションの手段としてイラストレーションに興味を持つ。アパレル、デザイン会社勤務を経てフリーランスのイラストレーター。広告、雑誌などを中心にイラストレーターとして活動。近年は絵画作品制作に軸足を移す。

デザイン

平野由記

「たとえ仔馬が死にかけていても、人は助けないんですよ。」

動物を助けることは良いことだ、という人間本位の価値観で暮らしている私にとって、都井岬での人と生き物との関係は驚くことばかりでした。

avec Toi は「あなたと共に」と「都井岬と共に」のダブルミーニングのタイトルです。デザインでは、人と自然の共存を表現したいと思い、小枝や実を拾うことから始めました。それらを並べ、タイトルロゴのデザインが完成しました。

スズキさんのイラストは、色数がとても多いのに絶妙な調和が保たれ、それは自然界のバランスの様でした。制作が進み、アーティストから届く原稿にも、共存というテーマが色濃く現れ、それは当日のパフォーマンスを通して身体を通っていきました。自然との適切な距離と共存とは何か、今も考え続けています。

グラフィックデザイナー。1984年生まれ宮崎出身。九州芸術工科大学卒。デザイン事務所を経て2010年に独立し「ウフラボ」の屋号で活動。2018年に宮崎へUターンし、ギャラリー兼事務所「サムタイムズ」をオープン。医療、福祉、こども関連の事業に多く関わり、外側だけでなく、内側からみつめ、考えるデザインをモットーにコミュニケーションデザインを提案する。

avec Toi とはなんだったのか

avec Toi から一ヶ月半が経ち、あの二日間を思い返しながら原稿を執筆している。夢で見た内容を思い出すのが難しいことによく似て、強烈な体験だったはずなのに、その輪郭はぼやけ、妙な浮遊感がある。まるで非現実的な旅から、現実に帰ってきたような心地が続いている。

各地で盛んに行われる地域型アートプロジェクトの意義の一つとして、しばしば「アーティストの視点で地域の魅力を再発見する」ということが言われる。今回のイベントも例外ではないのだが、そう言い切ってしまうことにどうにも違和感が拭えない。結論を先に言えば、おそらく「視点」や「発見」という言葉が持つ、視覚のみによる認知や特定の立ち位置から物事を捉えるような指向性がそぐわないのだ。都井岬で私たちが体験したことは、何かを「見る」ことに留まらず、いわば何かに「なる」というような、もっと全体的かつ身体的なことだったと思う。

五十嵐靖晃によるワークショップ《風と馬》は文字通り「馬になる」ものだった。土地と自然の関わりを読み解き、人々とともに一つの景色を作り上げる作品を発表してきた五十嵐だが、このワークショップは、何かを可視化させているわけではない。馬になった参加者たちは、小松ヶ丘をただ歩き、時に立ち止まり、自分の内面にこの土地や馬の存在を染みこませることによって（端から見ると何も変わっていないにも関わらず）、目の前に立ち上がる景色を一変させた。

川村亘平斎の影絵パフォーマンス《御崎馬の夢》ではカラスが運んだソテツの物語と年老いた雌馬の見る夢によって、また伊達忍による映像作品《界》では、都井岬火まつりを支える人々の姿によって、悠久の歴史の中でくり返されてきたこの地に生きる生きものや人の営みが写し出される。また、秋田氏による都井岬ガイドでは、御崎馬に留まらず小松ヶ丘に生息する植物や、いたるところにある馬の糞の下にいる虫たちの生態にまで目を向けた。馬の糞は虫たちによって分解され、また草が生え、馬がまた食む。足元の見えない場所でも、生きる営みが連綿と紡がれていた。

都井岬にいると、私たちもその大きな循環の只中にいるという事実が、とてもすんなりと身に染みる。私たちは全体の中の一部に過ぎないが、一部であり全体そのものなのだという感覚、言い換えると個として存在しているつもりの自分の輪郭が溶けていくような感覚を覚えた。それはとても心地の良いものだった。

古賀昌美（宮崎県立美術館 学芸員）

1991年福岡県生まれ。九州大学大学院芸術工学府修士課程修了。専門は文化政策、アートマネジメント。社会の中で美術館が果たす役割や、地域とアートの関係性に関心を持つ。公益財団法人福武財団、福岡市美術館、NPO法人まる（九州障害者アートサポートセンター）を経て、2019年より現職。担当した主な展覧会に「美術館を編む—宮崎県立美術館の25年」(2020)、「白髪一雄—行為にこそ総てをかけて—」(2022)。

特別付録！

御崎馬カード

MISAKIUMA CARD

五十嵐靖晃さんのワークショップ「風と馬」では、机に描かれた小松ヶ丘のマップと特製の「御崎馬カード」で、都井岬や御崎馬たちの特徴などを紹介。この「御崎馬カード」は、主に小松ヶ丘に暮らす 44 頭（ワークショップ当時）の馬たち 1 頭 1 頭のことがわかる優れものなのだ。なかでもハーレムリーダーの世良田明呼さんがつけたキャッチコピーは秀逸。本ページに載せている各ハーレムのネーミングも、世良田さん談である。

これが御崎馬カードだ!!

1 頭ずつ割り振られた番号

( ) 内は人間に換算した年齢

性別・年齢

馬の顔写真

それぞれの性格をあらわす
キャッチコピー（世良田さん作）

包容力あふれる
グループ

参加者のハーレムが
風を探しに歩いたルート

ケンカ売りがち
グループ

課題は統率感
グループ

食に困らない
グループ

多様性を重んじる
グループ

ボーイズ

いなく
なりがち

気遣いの
グループ

ワークショップ当日、
五十嵐さんによって机に
描かれたマップ

avec Toi な人々

たくさんの人を巻き込んで開催された「avec Toi」。アーティストやスタッフはもちろん、フィールドワークや撮影で様々な方々にご協力いただきました。ここでは、今回のプロジェクトに欠かせない中心人物たち＝"avec Toi な人々"をご紹介します。

アーティストたち

五十嵐靖晃
アーティスト

嵐と海の男、探求心の塊

川村亘平斎
影絵師・音楽家

道なき道をゆく（物理的に）

伊達忍
映像作家

撮影中、暴風雨の中に消える

スズキトモミチ
イラストレーション

最高のイラストと至福のパフェ

平野由記
デザイン

迷える制作チームを導く

グンジキナミ
記録（写真・文）

半歩後ろでやさしく見守る

宮崎県立芸術劇場

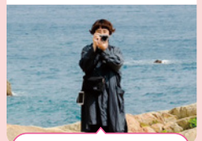
露木拓真
制作

T≒UMA

嶋田翔太
制作

期待の大型新人

林田古都里
制作（フリー）



うっかり途中で劇場退職

市役所の人々

長谷部祐子
串間市役所

頼れる縁の下の力持ち

秋田 優
串間市役所

全てはこの人から始まった

志原 好
串間市役所

信頼と安心の神スピード対応

黒木隆介
串間市観光物産協会

いつも笑顔の陰の立役者

ウマベンジャーズ

小林郁雄
宮崎大学農学部附属住吉フィールド

ときどき人か馬かわからない

世良田明呼
エコツーリズム認定ガイド

独特のネーミングセンスと馬紹介

渡邉木直
野生馬監視員

フットワーク軽すぎる
最年少ウマベンジャーズ

串間市観光物産協会

都井岬を知りたくば、この人たちに話しかけるべし

愉快でかっこいい、都井岬を守るボスたち

都井岬牧組合

迫田幸四郎
組合長

今村政樹
事務局長

都井岬の人々

迫田志美子
都井岬 黄金荘

川﨑秀雄
民宿 海洋荘

前田リツ子
前田商店

井手喜美子
公益社団法人橙光会 都井岬支所長

都井地区の人々

井手武文
井手石油 / 都井岬振興会 会長

川﨑義成
海のこころ

土持祐幸
都井神社・御崎神社 宮司

都井の生活を支える男たち

保存会の人々

火まつりの主役！都井地区柱松保存会＆柱松大おどり保存会

若い衆

子どもたち

山下辰幸

大谷重満

井手利守

井手美穂

石上雄士

林良弘

ヒアリング協力者

串間の歴史はこの人たちに聞け！

宮田浩二
串間市役所 OB

井手一成
旧吉松家住宅 副館長

丸山隆照
普門寺 住職

avec Toi の蹄跡

Y	M	できごと
2022年	7月	プロジェクト「の、まど」を都井岬でやりたい、と制作の露木がつぶやく。劇場の都井岬仲間（?）、林田も加わってプロジェクト始動。串間市役所の秋田優さんにご連絡する。
	8月	秋田さんと初めての打ち合わせ。まだまだコロナ禍の真っ最中、宮崎市と串間市をｚｏｏｍでつないで、まずは顔合わせといったところ。
	9月	都井岬に足を運び、実際の場所を見ながらあれやこれやと構想をふくらませる。
	10月	都井岬の伝統行事「馬追い」が行われ、露木・林田も見学。串間市役所との打ち合わせでは、生涯学習課の長谷部さん、志原さんも加わりいよいよ具体的に企画内容を詰めていく。
	11月	川村亘平斎さんとの打ち合わせで、年明けにフィールドワーク（以下ＦＷ）を行うことになる。この頃は串間市や都井岬に関する資料を片っ端から集め、机が資料に埋もれていく……。串間市役所とも打ち合わせを重ねる。
2023年	12月	公私の時間を使って毎月のように都井岬に通う。世良田明呼さんの野生馬ガイドに参加。〝馬ドラマ〟溢れる解説に衝撃を受ける。伊達忍さんとも打ち合わせを行い、こちらも年明けからＦＷと撮影を始めることに。
	1月	伊達さんと初めてのＦＷ。都井岬では、伝統行事の「野焼き」が行われる。
	2月	五十嵐靖晃さんとオンラインで打ち合わせ。五十嵐さんのＦＷは4月に予定することになる。
	3月	川村さんの3日間のＦＷ。川村さん、ソテツに魅了される。都井岬振興会の井手武文さんが、かつて駒止の門の手前にあったという鳥居の場所や、民家にある約４ｍのソテツを案内してくれる。
	4月	**企画概要の情報公開** 嶋田が制作に加わる。スズキトモミチさんとキービジュアルの打ち合わせ。五十嵐さんの3日間のＦＷでは、かつて御崎神社で「よどまつり」というお祭りがあったことが判明。井手石油では、井手よ打手武文さんとハナエさんの幼馴染トークで記憶の扉が開く……。
2023年	5月	プロジェクトのタイトルが「avec Toi」に決まる。 記録のグンジキナミさんや、デザインの平野由記さんとも打ち合わせが始まる。SEABISCUIT PARLOUR で平野さん、スズキさんと一緒にキービジュアルの打ち合わせ。馬のイラストに制作チームのテンション爆上がり。
	6月	各アーティストや市役所などと打ち合わせを進めていく。 グンジさんも同行して、伊達さんの撮影が本格的に開始する。
	7月	**公式 note スタート** 市役所や牧組合の方にも参加いただいて、五十嵐さんのワークショップ（以下ＷＳ）に関する打ち合わせ。都井岬と千葉県、福島県を繋いでオンラインで行われ、馬と人の安全対策等も検討する。
	8月	**フライヤー公開** 伊達さん、串間に通い続ける。大おどりの練習風景など、この月の撮影は計8日間に及んだ。 都井岬で「都井岬火まつり」が4年ぶりに開催。五十嵐さんも合流して、都井地区のゲストハウスに滞在しながらＷＳの構想を練る。
	9月	**公式 Instagram スタート** **チケット申込み受付開始** 秋田さん、串間市観光物産協会の黒木さんと一緒にビジターセンターの大掃除。協会の協力で、黒木さんが当日までときどき空気を入れ替えてくれることに。 下旬には「馬追い」が行われ、制作チームとグンジさんも参加。
	10月	**「avec Toi」当日** 五十嵐さんは約１週間前から滞在してＷＳの準備。川村さん、伊達さんも続々と都井岬に集結して、初めてアーティスト全員が顔を揃える。前日、そして当日2日間の様子は5～8ページで詳しく。翻訳、翌日、翌々日と会場を片付けて、解散。それぞれの場所へ……。
	11月	記録誌の制作を始める。平野さん、グンジさんとも打ち合わせ。 伊達さんと、記録映像と映像作品「界」の現地上映会に向けて準備を進める。

露木・林田の定番コースは、SEABISCUIT PARLOUR でパフェからの都井岬。

年末、露木はプライベートで独り、海洋荘に宿泊。川崎秀雄さんに励まされる。

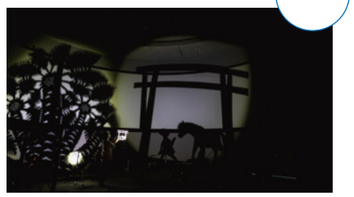
五十嵐さん・秋田さん・露木はなんとウマ年生まれの同い年！

黄金荘の迫田さんは歌がうまい！

その昔、岬の近くには祈祷師のじさまとばさまがいらっしゃったのだとか。

各地に散らばるメンバーたち。林田はこのとき、福島のスーパーの休憩コーナーの一角にいた。

映像は YouTube で公開！22ページを要チェック！



制作後記

おわりのことば

多くの人が「avec Toi」を「いわゆるアート・プロジェクト」だと思ってたし、それで良いんだけど、自分にとってavec Toiは綜合芸術＝オペラ。響きあう、作品(opus)の複数形。さまざまな、君との、関係性の物語。

自分のしていたのは、ただ信じることと、思いっきり喜んでたことだけ。都井には、たくさんの問いがおもちゃみたいに散らばってて、馬と人、Tとiをとりもつoは黄金虫かも知れなくて。みんながそれに応えてくれた。だからTはみんなからの贈りものを、また誰かに届けないと。

アーティストとは、ああ、そういう人たちなんだな、とあらためて強く思う。まだ見ぬ誰かを信じて、きっと君に届くと信じて、思いっきり喜んでる。「avec Toi」に関係してくれた多くの顔がアーティストだった。そして君が。いつか人気のなくなったフィールドでも、どんなキラーパスでも、きっと受けとめて、繋いでくれる。

さあ、avec Toiの幕があがる。海外の演劇では成功のおまじないにbreak a legと言うけど、馬たちのいる都井岬でそれはあまりにも残酷…ほらね、やっぱりこれはオペラだったんだ。そこでのおまじないはいつだって、こう囁くのだから。

Toi Toi Toi !!!

露木拓真

初めて都井岬を訪れたのがいつだったかは思い出せないけれど、初めて都井岬の面白さに触れたのは、小学5年生の夏でした。

岬や幸島の自然を体験する2泊3日の子ども向けイベントに参加した私は、スタッフだった、当時大学院生の秋田優さんに出会いました。秋田さんは私と友人たちに変なあだ名をつけられたのだけど、なぜか懲りずに仲良くしてくれて、以降毎年のように年賀状を交わす関係が続いています。

プロジェクト「の、まど」を都井岬でやりたいのだ、と露木さんから相談されたとき、真っ先に浮かんだのはその秋田さんの顔でした。すぐに連絡して、話はあっという間に動き出したのです。

そんなわけで、私にとってこの企画は、約20年前のひとつの出会いから始まっていました。そこにいくつもの新しい出会いが重なって、今、何かとんでもないことが起きたような気がするのです。この企画を「アート・プロジェクト」と呼んだのは、みんなが互いに巻き込んだり巻き込まれたりしながら影響し合い、この場所だから起こる何かを見たかったからだと、今あらためて思います。

ひとつの出会いや出来事から、新しい何かが生まれていく。この「avec Toi」からも、そんな小さな予感を感じています。

林田古都里

岬がすさまじい暴風雨と濃霧に見舞われた春のある日、初めて都井岬に足を踏み入れたのは五十嵐さんと入社1ヶ月も経たない新入社員の僕だった。入社して初めて大きく関わるプロジェクト。まずは、都井岬を知るところから始まる。写真で見るあの風景はどこ、、、ファーストインパクトが強烈で、都井岬＝なにかパワーを持つ場所という印象を持たざるを得ない。そんな岬に出迎えられ始まった僕の都井岬。

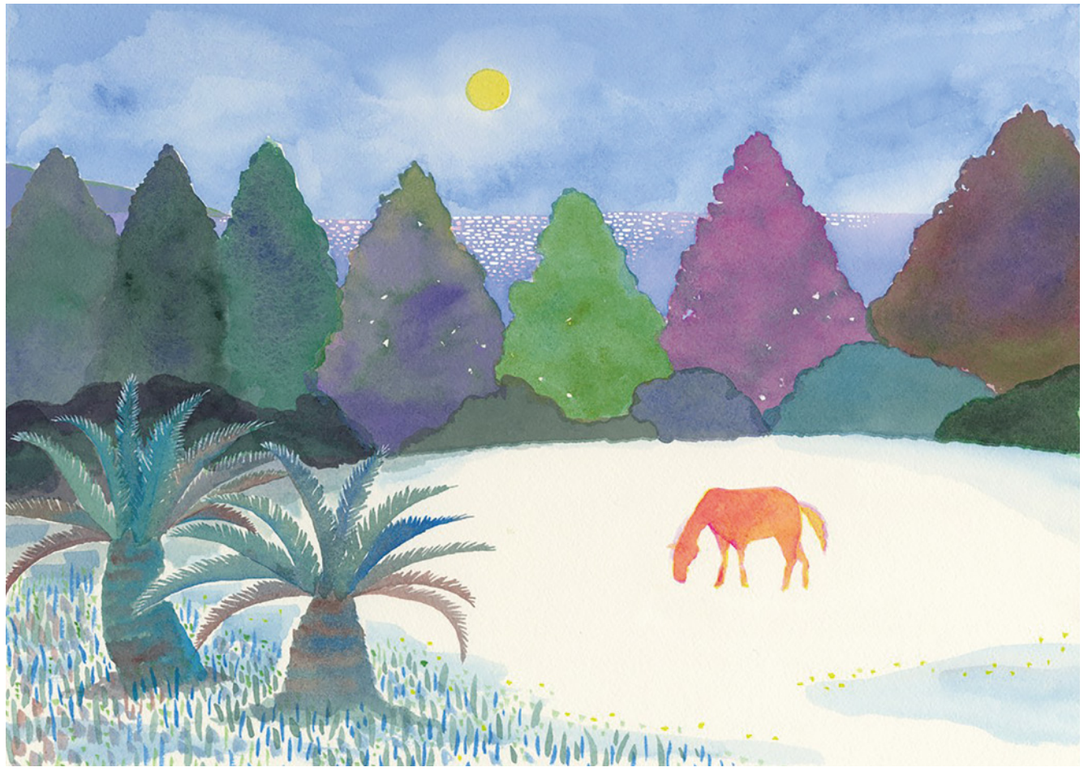
半年以上、何度も岬を伺い、都井の方の出来事の中に入らせてもらった。一番多く関わったのは火まつり。伊達さんの撮影に同行したあの夏は忘れられない。他にもその時しか感じることのできない、見ることのできない瞬間に立ち会った。都井で生きる人たちのたくさんの言葉を聞き、姿を見てさまざまなものを体感した。

10月8日、全てが詰まった2日間が終わった。都井岬を後にしたのは10日。最後の日は秋田さんと露木さんと三人で掃除をした。晴れて真っ青な海を見渡すともしかしてあの島？秋田さんが笑顔で種子島だと教えてくれた。御崎馬もあの景色を眺めていたことと思う。なんてご褒美なんだ、最後まで岬に魅せられた。

一回たりとも同じ瞬間は訪れない。僕にとって生命、出会いの尊さも学んだプロジェクトだった。岬に集まって人が交わり、環境も相まって生まれた奇跡的なもの。これが今、思うこと。

関わってくださったたくさんの皆さま、ありがとうございました。「あぁ、あのときは良かったなあ」とこのプロジェクトを思い出してくださる方がいれば嬉しいです。いつの日かまた会える日が来ますように。

嶋田翔太



映像作品「界」（監督：伊達忍）

ビジターセンターで上映した映像作品「界」を、YouTubeで全編公開！ぜひご覧ください。

「avec Toi」記録映像

当日2日間の様子を5分ほどのダイジェスト映像でご覧いただけます。

当日パンフレット

会場にお越しいただけなかった方も、当日配布したパンフレットをこちらからご覧いただけます。

SNSアカウント

プログラムやアーティストの紹介、企画の立ち上げや担当者の思いなどを綴っています。記録とあわせてお楽しみください。

note
avec Toi 公式 note
宮崎県立芸術劇場

instagram
@nomado_avectoi

参加アーティスト：五十嵐靖晃
川村亘平斎
伊達忍
特別協力：秋田優（串間市エコツーリズム推進室）

イラストレーション：スズキトモミチ
記録（写真・文）：グンジキナミ
デザイン：平野由記

舞台監督：土屋宏之
照明：工藤真一、花岡瑞姫
音響：関本憲弘、鎌田文夫

撮影協力：横田晴輝（映像制作 ToRUYO）
田部祐徳（jumpcut）
大学生スタッフ：池田彩雲、大野結子、奥原千紗貴、齋藤江連、嶋本陽葉、清水心寧、橋口拓人、早矢仕晶子、廣瀬志織、馬込亮太郎、松本千穂、彌永千穂

企画製作：公益財団法人宮崎県立芸術劇場
制作：露木拓真、嶋田翔太（宮崎県立芸術劇場）
林田古都里

主催：公益財団法人宮崎県立芸術劇場
共催：串間市教育委員会
協賛：TOIGLAM SOLASITA
協力：都井御崎牧組合、串間市観光物産協会、
柱松大おどり保存会、都井地区柱松保存会、世良田明呼、
小林郁雄（宮崎大学農学部附属住吉フィールド）、
井手武文（都井岬振興会）、宮田浩二、
井手一成（旧吉松家住宅 副館長）、
土持祐幸（御崎神社 宮司）、丸山隆照（普門寺 住職）、
井手喜美子（公益社団法人燈光会）、前田リツ子（前田商店）、
都井岬 黄金荘、民宿 海洋荘、海のこころ、
SEABISCUIT PARLOUR、串間市立都井小学校、
宮崎県立美術館、関わってくれた全ての皆さん

avec Toi ― 馬がいて、人がいて、そしてまた馬がいる ―